

《ゲネレオス群像》の再解釈  
—サモスにおける女神ヘラ信仰と彫像制作—

高橋 翔 筑波大学

《ゲネレオス群像 Geneleos Group》は、紀元前560年頃に彫刻家ゲネレオスによって制作された彫刻群である。エーゲ海東部に位置するサモス島のヘラ神域から出土し、台座上に男性像2体及び女性像4体が並ぶ構成からなる。本作例は古代ギリシアのアルカイック時代において家族の肖像を表した稀有な作例として記述され、また類例に乏しい彫像形式も見られることから、図像の解釈が試みられてきた。

近年では群像中の《父親像》が饗宴(シュンポジオン)に参加する男性の姿であることから、本作例は女神ヘラに対して饗宴を捧げる、当時の富裕な一族の姿と解釈される(Baughan, 2011)。しかし、古代ギリシアを通じてシュンポジオンは男性のための儀礼であり、同場面に女性が対等な姿で表される例は皆無である。すなわち、《父親像》のほかに《母親像》及び娘たちの像が並置される《ゲネレオス群像》は、シュンポジオンの場面と解釈した場合に図像伝統と矛盾が生じる。

発表者は、このような彫像群が制作された背景として、出土地であるサモスのヘラ神域に着目したい。ローマ時代にワロ Varro は、サモスでヘラが誕生し、ゼウスと結婚したという伝承から厚く信仰されたと記述した。またヘラ神域において女神の結婚を司る祭祀が執り行われたことにも言及する(Lactantius, *Divinae Institutiones*, 1.17.8)。ここで《ゲネレオス群像》における《父親像》と《母親像》は、同地域出土の《ヘラとゼウスの木製浮彫》のように、このようなサモスの伝承を反映した結果と推測される。

またアルカイック時代における彫像形式のひとつとして、少女像(コレー像)が挙げられる。そして《エウテュディコスのコレー Euthydikos' Kore》などアテナイのアクロポリス出土の作例を中心に、父親たちが女神に娘の守護を祈念したと指摘される(Fransenn, 2011)。《ゲネレオス群像》においても中央に3体のコレー像(娘たちの像)が配されており、奉納者が実在の娘の守護を意図した可能性がある。

他方《ゲネレオス群像》に先行して、同じくサモスのケラミュエス Cheramyes が数体のコレー像を奉納している。これらの少女はヘラに仕える従者と解釈され、奉納者ケラミュエスが女神の恩恵の受益者であることを明示する。このようなアルカイック時代における奉納行為の伝統(Day, 2010)に鑑みると、《ゲネレオス群像》において奉納者だけでなく他の家族の名も明記されている点は、奉納者の家族全員にヘラの恩恵があることを求めた結果であると発表者は考察する。

以上の過程により発表者は、《ゲネレオス群像》を単に富裕な家族の肖像ではなく、娘を持つ家族がヘラの守護を受益するために制作した奉納物と考える。本作例は、従来シュンポジオン文化との関連が強調され、サモスの社会において家族を顕示するための彫像群と捉えられてきた。しかし本発表では、ヘラに対する信仰に強く影響を受けて成立した可能性を提示したい。

(たかはし・しょう)